

カンパラ通信～ナカセロの丘から

第34回 ウガンダと宗教（その2） イスラム教等その他編

今回は前回に引き続きウガンダの宗教事情について触れたいと思います。ウガンダ国民の大多数が信者となっているキリスト教を前回に取り上げましたが、今回はそれ以外の宗教についてご紹介いたします。

皆さんはキリスト教徒に次いでウガンダで信徒数が多い宗教を直ぐに思い付きますか？正解はイスラム教徒（国民の13.7%）となります。それでは、まずイスラム教事情についてご紹介致しましょう。そうは申しましても筆者にはいつ、いかにしてウガンダの地にイスラム教が広がったといった基本的な知識は全くありませんでしたので、ウガンダの最高学府であるマケレレ大学でイスラム教を中心とした宗教学を専門にしているムハマド・チグンドゥ上級講師を訪ねてお話を伺いました。以下は同上級講師から伺ったウガンダにおけるイスラム教の概要です。

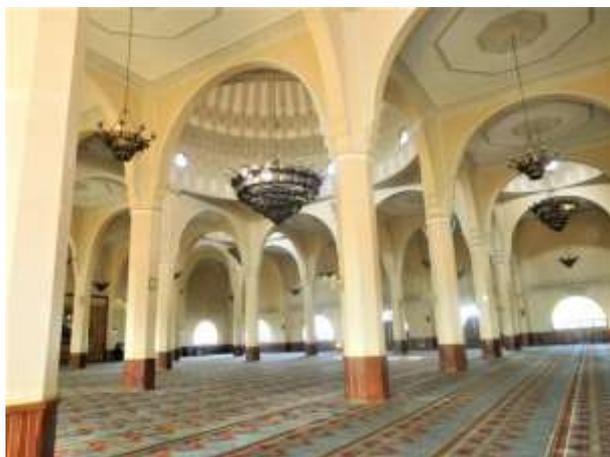


（通りを行進するムスリム校の生徒）

ウガンダの地においてイスラム教と接触があったのは1844年とされています。この時代はオスマン・トルコによるアラブ支配は確固たるものでした。エジプトもオスマン・トルコの支配下にあり、ウガンダの北の方に位置するエジプトから偶然に近い形でイスラム教の接触があったのではということでした。キリスト教の伝道のように、計画的に組織だった布教ではなかったとのことでした。

しかし、19世紀後半になるとインド洋と接する東アフリカ東岸のイスラム商人が商売のために内陸地域にまで進出するようになります（1844年よりも前に東アフリカ海岸地域からイスラム商人が既にウガンダの地まで来ていたという説もあります。）。前回のカン

パラ通信でも触れましたように、ブガンダ王国の当時のムテサ1世がキリスト教の各派とイスラム商人とを競わせて経済的利益を手に入れるため各宗派の布教を許しました。これによりイスラム教が本格的にこの地に普及していくことになりました。ただし、布教を第一の目的とし、そのためにミッション系の学校を建てて組織的にキリスト教を広めようとする伝道師と異なり、イスラム教の布教の背景には、イスラム商人が交易するためにアフリカ内陸部まで進出するという過程で副次的に広がっていたこと、もうひとつはイスラム商人が自らのお祈りのためイスラム寺院を建てる必要があったことです。このように目的意識の違いから地元民への布教はキリスト教ほどにはならなかったといえます。また、イスラム教の場合、信者は1日5回のお祈りの他ラマダンという約1ヶ月間日の出から日没まで飲食を絶つ決まりを年二回実行するなど強い意志が求められます。これに対してキリスト教の布教者は、土着の習慣や昔からの宗教的要素をうまく取り入れて一般の人にうまく取り入るようにしたといえます。イスラム教が商人つまり成人した人々を中心に持ち込まれたのに対し、キリスト教は積極的に学校を建て子供たちを教育に取り入れていく中でキリスト教に自然に傾倒していくようにその子供たちを仕向けることに成功したといえます。他方、イスラム商人はイスラム教布教のためには子供の教育からという方法をとらなかったためと当地の商人も子供達が自分の商売を継ぐことを優先し子供達の学校教育に熱心ではなかったといえます。そのような事情からインテリ層にはあまりイスラム教徒がない結果になっているそうです。学校教育を受ける機会が無かったという理由からマタトゥ（トヨタハイエースを使った小型の乗合いバス）やボダボダのバイク運転手の多くがイスラム教徒なのはそのせいだとのことです。また、イスラム教徒は酒を嗜まわないので、運転手に向いているという解釈も可能だそうです。キリスト教徒であっても個人用のドライバーにはイスラム教徒を雇うのは珍しくないそうです。お酒を飲むことがないのでその点安心だというのはよく理解できますね。そういえば、筆者の自家用車のために雇っている個人ドライバーも熱心なイスラム教徒です。



(モスク内観)

さて、ブガンダで同じような時代に国外からの3つの宗教（カトリック、英国教会～プロテスタント、イスラム）を国王が許した背景には、宗教間の対立を利用してブガンダ国王が利益を得ようとしたと冒頭で述べました。ところが、実際には国王自身が王族間での新興宗教の勢力争いに飲み込まれ、一方の宗教の支持派により追放されるということが頻繁にあり、違った宗教を奉ずる国王が担がれることがしばしばでした。そういう中ではイスラム教に帰依したブガンダ国王も出てきました。カレマ・ムグルマ国王、彼こそが1888年10月から約1年間国王の地位にあったイスラム教徒の国王でした。その彼も英国の軍隊により退位を迫られ、それに伴ってブガンダ王国のイスラム教信者も宗教的な迫害に遭いブガンダ国外に避難を余儀なくされました。それが皮肉にも今のウガンダの各地に広くイスラム教信者が住み着くことにつながったということです。イスラム教徒国王の追放・信者の離散が現在のウガンダの各地にイスラム信者が住み着くことにつながったという皮肉な話です。なお、人種的な違いからか、今の北部ウガンダのアチョリ地域にはイスラム教徒はあまりいないということでした。



(正面からカダフィ・モスクを望む)



(カダフィ・モスク遠景)

以上がチグンドウ上級講師から聞いた話でした。しかし、ウガンダが独立してからもイスラム教絡みで興味深いことがいくつかあるのでご紹介します。皆さんは、イスラム協力機構という国際機関があるのをご存知ですか？1962年に創立されたイスラム諸国の政治的協力、連帯を強化すること、イスラム諸国に対する抑圧に反対し、解放運動を支援することを目的とする国際機関です（Wikipedia より）。そのようにイスラム諸国の為の国際機関にイスラム教徒が人口10%そこそこのウガンダも加盟しているのです。この加盟を1974年に実現させたのが本人もイスラム教徒であったイディ・アミン大統領でした。アミン大統領は、国内において社会的に軽んじられていたイスラム教徒を組織化してその地位を引き上げるよう施策しました。このようにイスラム教徒に肩入れして欧米諸国に背を向けたアミン政権を財政的に最も支援したのがカダフィ大佐率いるリビアでした。カンパラ市内中心の小高いオールド・カンパラ・ヒルには英国の下の保護国となったウガンダの

初代総督の砦がありましたが、アミン大統領は、カダフィ大佐に対する感謝の意なのか、その土地を差し出しました。そこに今ではカダフィ大佐の資金により建てられたサブサハラ・アフリカ最大の威容を誇る「カダフィ・モスク」がそびえています。カダフィ大佐が2011年に殺害されリビアからこの回教寺院の維持管理に必要な送金が途絶え、2013年には「ウガンダ・ナショナル・モスク」と改称されています。しかしながら今も「カダフィ・モスク」の愛称で人々に親しまれ観光の名所になっています。モスク内はとても広く、高さ50mのミナレットまで階段で登って行けますが、そこから四方に広がるカンパラ市内を見渡すことができます。それともうひとつ、ウガンダでは年間14日ある国民の祝日のうちイスラム教由来の祭日が二つ定められています。ラマダン明け祭りと犠牲祭です。この点に宗教的に寛容な姿勢が表れているような気がします。もっともキリスト教由来の祝日の方は6日もあるのですが...

キリスト教とイスラム教を扱ったため、これでウガンダ人口の98%の宗教事情をカバーしたことになります。その他の宗教は全部足しても1.7%と7万人足らずにしかならないのですが、それでも触れておきたいマイナーな宗教がありますので、もう少しお付き合いください。

一つ目はヒンズー教です。英国がウガンダを保護国化した時に現地行政府が鉄道その他のインフラ建設のために、また、現地に熟練労働者が不足していたため小売業やサービス産業、下級官僚に従事させるために当時英国の植民地であったインドから労働者を連れて来ました。その数は徐々に増えていき、ウガンダが独立した後になる1970年には6万5千人ほどのインド系住民がいたと言います。これらのインド系住民の全員がヒンズー教信者というわけではありませんが、それなりの部分を占めていたと思われます。しかし、1971年にクーデターで政権を掌握したアミン大統領がその翌年ウガンダ国籍を持たないインド・パキスタン系住民の国外追放を命じました。結局ウガンダ国籍を有する者も含めほとんどのインド系住民が国外脱出したということです。その影響でウガンダの経済は壊滅的打撃を被りました。それだけインド系住民が経済を握っていたということです。1986年に政権を奪取したムセベニ大統領は、疲弊した経済復興のため国外避難していたインド系住民の帰還を懇請しました。この呼びかけに応じてそれなりの数のインド系住民が帰ってきましたが、アミン大統領の時代の数には到底達しませんでした。現在もアミン時代のインド系住民の人口には及びませんが、法人税の高額納入企業の多くが再びインド系企業が占める結果となっていて、1%にも満たないインド系企業が支払う法人税がウガンダ全体の3分の2を占めているといます。彼等は主に都市部にて生業を立てていますので、ヒンズー教寺院が見られるのもカンパラやジンジャという都市に限られています。しかし、3つの塔がそびえ立ち並ぶその特徴的な建築様式は際立っています。



(カンパラ市内のヒンズー寺院)



(丘の上にそびえるバハイ寺院)

二つ目にご紹介したいのはバハイ教です。バハイ教を聞いたことが無い人が多いのではないかと思います。ウガンダに来るまでは私もその一人でした。バハイ教は、19世紀半ばにイランで生まれた一神教です。その創始者は、イエスやマホメットに続いて神によりこの世に送られて来た預言者だと称して布教活動を開始しました。しかし、イスラム教が支配的なイランで迫害を受けた信者はイスラエルに移動し、同国のハイファに総本山を構えています。私がカンパラ郊外の丘の上にそびえ建ち絵葉書にも使われとても綺麗なバハイ寺院を訪れた時、南スーダン人の若者が近づいてきて寺院を案内してくれました。彼が言うには、バハイ寺院は世界に9つしかないこと、しかし、それが全大陸に散らばっていること、アフリカではこのカンパラにしかないこと、そして、祭事を司る聖職者はなく、経典的なものはないということでした。不思議な宗教と思いませんか。ウガンダのバハイ共同体のホームページによれば、ウガンダでバハイ教の布教が始まったのは1951年で、バハイ寺院が建てられたのがその10年後の1961年とのことです。アミン大統領の時代にはバハイ教は禁止されたそうですが、今は宗教の自由が保障されているので自由に活動しています。ウィキペディアによれば、バハイ教信者は世界のほとんどの国にまで広がっていて信者数は公称600万人だと言います。ウガンダでの信者数はよくわからず2万人という見積もりから10万人に及ぶとしている説もあるようです。



(副大統領のウガンダ仏教センター訪問の報道写真)

最後は、やはり仏教について触れなければなりませんよね。そうなんです、ウガンダにも仏教団体があるのです。実はウガンダのセカンディ副大統領が本2019年4月に日本で開催された世界仏教デーに主賓として招かれたのです。そう聞くとセカンディ副大統領は仏教徒とお思いになるでしょうか？ところが彼は敬虔なカトリック教徒なのです。現地紙によると、ウガンダでの仏教の始まりは、どうやらあるウガンダ人がインドの大学に留学中に2名のタイ人の僧侶学生と知り合ったことに由来するようです。この出会いがきっかけでそのウガンダ人は仏教に帰依するようになり、ウガンダに帰国した1998年にエンテベ郊外に仏教センターを創立したとのこと。そしてどういう訳か、仏教徒のどなたかがセカンディ副大統領との知己を得て日本での世界仏教デーに招かれるよう手配したようです。最後の最後に気になるウガンダの仏教徒数ですが、先の現地紙記事には100名あまりのウガンダ人が仏教を実践しているとありました！

(了)